

選びとられた景

浅野 則子

【要 旨】

万葉集の中で宴席の歌としてはもつとも後ろに位置している歌群がある。それらは、歌の内容によって三つの群に分かれている。従来は、高円の離宮を詠うことで聖武を偲ぶ五首をとりあげるものが多く、その前に置かれている十首は偲ぶ歌を強調するためのものとされていたが、宴に同席した人々にとつて景を詠うことは以下の歌群と同じように景を通して歌の世界をつくりあげていくことであると考えられる。

【キーワード】

歌の文化圏・宴席・庭園・景物

はじめに

天平勝宝二年、家持が氏の長である大伴氏は藤原氏の力に押され、その力は父の代よりも弱まっていた。この年に中臣清麻呂宅で宴が開催されている。「中臣清麻呂宅の宴」という題詞を持つこれらの歌群については、始めの十首、後の五首、さらに「山斎を属目して作りし」三首と分けて考えることができる。はじめの十首は清麻呂宅の庭園の景物を歌い、次に「高円の離宮の処を思ひて」五首が詠われ、更に庭の山斎を眺めて詠まれている。問題としようとしている始めの

十首の歌群は、同じ考えを持つ人々が集まり、親交を深めたものであり、その結果、同席者の思いが次の高円離宮から聖武を偲ぶ歌へとつながっていったと考えられている。田中大士氏が「宴席の場にことに没入した詠みぶり」とされるように景物に注目されてはいるものの、この歌群が何を目的としているかについて論じられる事は少ないといえよう。同じ考えを持つ人々が集まった宴で歌によって親交が深められたとするならば、ここでは景物をどのように取り上げて詠うのだろうか。この宴における景物の意味を考えてみたい。

【一】

歌を見ていこう。二月に、式部大輔中臣清麻呂朝臣の宅にして宴する歌」という題詞を持つ以下の十首である。

- ①恨めしく君はもあるかやどの梅の散り過ぐるまで見しめずありける
右の一首、治部少輔大原今城真人
- ②見むと言はば否と言はめや梅の花散り過ぐるまで君が来まさぬ
右の一首、主人中臣清麻呂朝臣
- ③はしきよし今日の主人は磯松の常にいまさね今も見ること
右の一首、右中大伴宿祢家持
- ④我が背子しかくし聞こさば天地の神を祈ひ袴み長くとそ思ふ

右の一首、主人中臣清麻呂朝臣

⑤梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしそ思ふ

右の一首、治部大輔市原王

⑥八千種の花は移ろふ常盤なる松のさ枝を我は結ばな

右の一首、右中大伴宿祢家持

⑦梅の花咲き散る春の長き日を見れども飽かぬ磯にもあるかも

右の一首、大蔵大輔甘南備伊香真人

⑧君が家の池の白波磯に寄せしば見とも飽かむ君かも

右の一首、右中大伴宿祢家持

⑨愛しと我が思ふ君はいや日異に來ませ我が背子絶ゆる日なしに

右の一首、主人中臣清麻呂朝臣

⑩磯の裏に常よ引き住む鴛鴦の惜しき我が身は君がまにまに

右の一首、治部少輔大原今城真人

二十一四四九六～四五〇五

題詞によれば、天平宝字二(七五八)年二月に開催された宴である。この時家持は、右中弁として都に在る。まず、この宴席の出席者について考えてみたい。宴の主人である中臣清麻呂は式部大輔で当時五十七才^{注②}。他の出席者は、まず挨拶の歌を作った大原今城真人が治部少輔で最も官位が低く、その上官としての市原王、大蔵大輔甘南備伊香真人が名を連ねている。これらのメンバーはすべて家持と同じ歌の場で歌っていることから、都において、家持が信頼すべき人々であり、従来いわれているように「仲間同士」と考えてよいであろう。

宴の歌はすでに松本剛氏が論じているように「二首ずつが対応関係」にあるとみてよい。記されている順を追って歌の表現をみていきたい。まず、今城の相聞の形式をとる歌から始まっている。①の歌では庭の梅を「散り過ぐる」まで見せてくれないと詠い、それに対して主人清麻呂は「君が來まさぬ」と花の盛りに來なかつたのはあなたで

はないかと応じている。このような花をめぐる対応には、「花を見るために招く」ということがあつたはずである。多くは相聞歌である。表現を確認していきたい。

⑪雁がねの初声聞きて咲き出でたるやどの秋萩見に來我が背子

十一二二七六

⑫我がやどの萩花咲けり見に來ませいま二日だみあらば散りなむ

八一―一六二一

⑬藤原の古りにし里の秋萩は咲きて散りにき君待ちかねて

十一二二八九

⑭我がやどの一群萩を思ふ児に見せずほとほと散らしつるかも

八一―一五六五

⑮我がやどの花橋は散りにけり悔しき時に逢へる君かも

十一一九六九

⑯來て見べき人もあらなくに我家なる梅の初花散りぬともよし

十一二三二八

⑪の歌は季節の変化を感じさせる雁の初声を聞いて萩が咲き始めたとしている。そして咲き始めたばかりの萩は、いち早く秋を感じて欲しいという相手を誘うための口実ともなる。⑫は巫部麻蘇娘子の作である。ここでは、萩の花の盛りを見つつ散る前に訪れて欲しいと「いま二日」と日を限定して誘っている。⑬では相手の訪れがないため、見せようとしていた萩は散ってしまったと嘆いている。花が咲くことはこのように相手を誘う口実として選びとられる景とすることができ。咲いている事が招くためには必要であるために、散ることは、残念なこととなってしまふのである。⑭の歌は家持のものであるが、散らしたことは見せられなかつたこととして嘆いている。⑮では見せたかつた橋が散ってしまった後に逢つたことが残念であると詠う。更に

⑯では、花は咲いているが、見るべき人がいないのでせっかくの「初花」ではあるものの散ることを厭わないというのである。問題としている①の歌では、まず散る梅が詠われる。ここでは、人を招くための口実としての景として花の盛りに対する状況として見るとマイナスのイメージとして歌っているといえよう。

宴席の梅については、散ることは雪と見間違ふという表現をとることが多いが、ここでは、漢詩的表現としての見立てではなく、梅を季節の花そのものとしてとらえていることに注目したい。宴の始まりは庭の梅であり、同席者にとつての同じ空間の景物から詠い始められている。ここではまず、見ることによる空間の共有が意図されている。庭にある梅を用いたのは、単に挨拶として歌い始められたのではなくこの日の宴の歌に求められていたことではなかったのだろうか。

二

梅を介しての挨拶を詠う歌の次の歌は、主人清麻呂に対する家持の挨拶である。ここでは、この日の宴の本題であり、賓客として提示すべき一番大事なことを招かれた者を代表して詠っていると言えるだろう。「見る」ことから始まったこの日の宴の歌は、庭園の景物から主題にふさわしいものを選び出されなければならない。主人の長寿を願うために選ばれたのが「磯松」であった。「磯松」とは万葉集中この一例のみであり、『日本新古典文学大系』^注では「磯の上に生ふる小松」を一語にしたような例とするが、「常にいませね」^注という言葉を持ち出すためには、永い命を持つものが必要であることに他ならない。続く④の歌は家持に対する主人の挨拶であり、この歌には「見る」ことが詠われないが、主人の詠う「我が背子しかくし聞こさば」は、招かれた側を代表して詠う家持との贈答によってこの日のテーマを表現したことになる。

①・②の歌でとりあげられた「梅」は散ると詠われるが、ここでは一転して常緑である「松」を取り上げていく。『新潮日本古典集成』は「松」には「待つ」^注の意がこもるとするが、「見る」ことから始まった宴はここでは、視覚のみでなく時間的な広がりへと展開していく。さらに梅は散ること故に否定されるのではなく、庭園で選ばれた景物として「見る」ことを通して松へと結びつき、宴のテーマへと導かれたといえよう。

④の主人である清麻呂の歌は家持の歌と一対のものとして、主人として招かれた者の気持ちを表している家持の歌に応えたものである。主人からの宴に集う人々に対しての感謝の気持ちを表している。主人の側から「背子」と詠いかけることは、対応する歌を詠った家持のみでなく、今、その場にいる人々を結びつけるものでもあろう。

⑤も主人を称える歌である。ここにおいて歌は、再び庭園を「見る」ことへと転じている。⑤の歌は庭の梅そのものの景である①・②をふまえているものであるが、主人の長寿を詠った後では共有する空間の梅をどのように表現しなければいけなかったのだろうか。ここでは「遠けれど」という言葉に注目したい。

宴席では次のように詠われる。

⑰雲の上に鳴くなる雁の遠けども君に逢はむとたもとほり来つ

八一一五七四

⑰は橘諸兄宅の宴において、宴の始めに詠われたものである。宴が開催された季節の景物をとりあげてはるばるやってきたことを詠うが、それは、参加する宴が大切なものであるということになる。宴席でこのような表現が用いられるのは、万葉集においては、問題としている歌群と同時代のものに限られるが、ここでは「遠い」距離を問わずに來る事に繋がり宴の大切さ、主人への強い思いを強調するも

のとなり、「遠さ」はやって来たことへと結びついていくと考えられよう。しかしながら、この歌では、作者市原王は「心もしのに君をしそ思ふ」と歌い、やって来るとは表現していない。歌では、宴に同席している「今」ではなく、「遠く」にいる時に思っていたというのである。このように考える限り、「かぐはし」とは梅との距離を示すものであり、実態は置いても「遠い」距離を隔てながらも感じ取れるものでなくてはいけない。距離を詠うための「梅」とはどのようなものなのであろうか。この「かぐはしみ」は、宣長が『万葉集には梅の花いと多かるに、香をよめるは、たゞこの甘の巻に、うめの花香をかぐはしみ、遠けども心もしぬに君をしぞ思ふ、とある一ツのみにて』という理解を示して以来、万葉集で唯一「香」がよまれているとされる。

『新潮日本古典集成』では香りから「主人の高潔であることをにおわす」とし、また『新日本古典文学大系』では「梅の芳香に寄せて主人の人の柄を称えた句」とするよう相聞的な表現をしつつ婉曲に主人を称えんとするが、はたして嗅覚としての香りとのみ解釈してよいのだろうか。松本氏は⑤の歌が次の⑥の「松」と対応していることから、梅に對して呪的色彩を与える言葉とし、「かぐはし」を『靈妙』な性格をもつもの」として呪的な言葉とすることを言語学的な観点から述べている。この宴において⑤の歌は⑥と対応するため、梅と松との対応も考えるべきであるが、まず、万葉集中における「かぐはし」の例を見ていきたい。

「かぐはし」と詠われる花は、問題としているもの以外では、すべて橘である。

⑱ かぐはしき花橘を玉に貫き送らむ妹はみつれてもあるか

十一一九六七

⑲ 橘の下吹く風のかぐはしき筑波の山を恋ひずあらめかも

二十一四三七一

⑳ ……ほととぎす 鳴く五月には 初花を 枝に手折りて 娘子らに つとにも 遣りみ 白たへの 袖にも 扱入れ かぐはしみ 置きて 枯らしみ あらゆる 実 は 玉に 貫き つつ 手に 巻きて 見れども 飽かず…

十八一四一一一

㉑ ほととぎす 来鳴く五月に 咲きにほふ 花橘の かぐはしき 親の御言 朝夕に 聞かぬ 日まねく 天離る 鄙にし 居れば あしひきの 山のたをりに 立つ雲を よその み見つつ 嘆くそら 安けなくに 思ふそら 苦しきものを 奈呉の 海人の 潜き取るといふ 白玉の 見が欲し 御面直 向ひ 見む時 までは 松柏の 榮えい まさね 貫き我が君

十九一四一六九

㉒ 見まく 欲り 思ひしなへに 縋かけ かぐはし 君を 相見つるかも

十八一四一二〇

⑱は橘の花そのものの属性として詠われる。⑲は防人歌であるが風が吹き抜ける事によって伝えられるとするため、香りとして考えてよいであろう。また ⑳の歌は家持の作であるが題詞に「橘の歌」とあるように、橘そのものについて詳しく表現している中で五月の花の時期に「袖にも扱入れ」るのは香りとともにすることであろう。㉑の歌も家持による。越中から「家婦の京に在る尊母に贈る為に、詠へられて」作ったものである。ここでは花橘と結びついてはいるが、それが「親の御言」であることを考えねばならないだろう。優れて立派であると解釈されることもあるものの、「かぐはし」が「親のありがたいお言葉」とつながることについて詳しくふれているものはない。ここで注目すべきは、家持が越中から都へと送っていると言ったことである。香り高いという意味を持ちつつも、距離を超えて相手を引きつけるものとして「親の御言」を詠ったのではないだろうか。㉒は人そのものについて使われている。㉒の家持の歌は「京に向かふ時に、貴人に見え、及び美人を相て 飲宴する日に 懐を述ぶる為に、儲け作りし」とい

う題詞を持つ。ここでは「縷」と関わり、かづらをつけた姿のすばらしさを詠うとするが、どちらも嗅覚としての香りの意味を超えて、距離を縮めるもの、惹きつけられるべきものと考えられないだろうか。このような例を見る限り、見ることのみではなく「かくはしき」を加えられたものとして遠くまで伝わり、それゆえに感じ取った者が遠くから来ることとなる。①・②では「散りすぎた」とされるが、視覚的に盛りを過ぎたとしても、主人の庭園の梅には「かくはしき」があるため、そのすばらしさを感じられるということになる。⑤の梅は①・②の招く歌の形を踏襲しつつ新たな展開を見せ、宴の場と外をつなぐものとしての梅として歌世界に作り出されたといえよう。①・

②の歌の散ってしまったと言う言葉に対応し、散るまでの間遠く離れていても、庭の梅を通してすばらしいあなたを偲んでいたということになる。この歌は「遠けれど」と遠いことを否定することから始めている。宴席の歌に使われるこの表現を、相手の徳と結びつけ、さらには、宴の初めの歌からの流れに組み込んだのが、この歌であった。しかしながら、見ることを中心として詠われた宴の景は遠景となっていました。それをもとの庭の景へと戻したのが⑥の歌であろう。

⑥の歌は家持によって詠われている。植物に関しての「八千種」という表現は、家持はこの歌の他にも詠っているが、「八千種に草木を植ゑて時ごとに咲かむ花をし見つつ偲はな 二十一四三二四」という歌や長歌において「・・・春の初めは八千種に花咲きにほひ山見れば見のともしく川見れば見のさやけくものごとことに栄ゆる時と見したまひ・・・二十一四三六〇」というように「花」と言う表現はないものの、種々の花の美しく咲く様子を詠うものである。「八千種の花は移ろふ」とは一種類の花だけではなく、花全体に対するものであるが、この宴席では①・②の歌の梅が「散る」ことが意識されているであろう。①・②の歌について直前の⑤で市原王は散るまでの間、遠くでそのすばらしさを感じ取っていたと詠ったが、ここで家持は自ら

の③の歌に結びつけ再び庭の景としての松を見ることを求める歌としている。景として、すでに散った梅ではなく、今、詠うべきものは今も変わらない姿である松を選びとったのであろう。さらにこの歌では、「将来の幸福」を祈るための松を結ぶという行為を願うことにより、歌の中にこれから先へと続いていく時間をとり入れたのである。⑤の歌が宴までの時間を詠うことに対して宴から先の時間を詠ったといってもよいであろう。

【三】

前の二首で主人のすばらしさとこれから続くであろう幸福を願った歌により、宴の歌は目的をほぼ果たしたといえよう。その後は宴の目的にそって景物を歌に取り込むことによる新たな展開が求められよう。

⑦の歌は⑥の歌を受けつつも「散る」ことを惜しいとは詠わず、散る花を景物として春の長い日のどけさへとつなげていく。ここで梅の花が散るといふ表現は盛りを過ぎたということではなく、梅が散ることを見ることによって「飽かぬ」時間を共有することになる。梅は、空間的な景物でのみでなく、共有される時間をも表現しているものとなっていく。このようにとらえていくと、その前の歌で「八千種の花は移ろふ」ものであっても、変化すること自体が宴では共有しうるものとなっていくのである。それは花が時間と結びつくことで否定されるものではなくると言い換えられるのではないだろうか。また、一方でこの⑦の歌は、庭園から新たな「磯」という景物を選びとっている。次の歌では主人をほめるが、まず、見ることによって景をほめ、その景から主人へ続けていくことになる。こうして宴の主人、中臣清麻呂は自らの庭園を通して賛美される対象となっていくのである。

次の⑧の歌は、こうした⑦の歌の見ることによって共有された時間

と空間を受けつつ、「飽かぬ」という部分を主人への賛美と転用していく。⑧の歌では、空間としての「見る」ことは花から池へと移り、その池に白波が寄せていくという動きのなかで時間をとらえようとしており、その様子を序詞に用いるという手法である。⑦・⑧の歌によって宴の目的である主人への賛美は宴に集まった人々が見ることによって作り出した歌世界においてなしうることとなった。見ることにより主人を称えることになるのである。こうして、かぐわしい梅、常磐なる松と続いた歌の景は、実態を超えて、当日の宴の目的にふさわしく歌世界に再構築されていくのである。

現前の庭園から選り採られた景物は⑦・⑧で「池」を見るという新たな展開を見せた。それらを受けた⑨の歌はいかにこの宴を終えるにふさわしい歌に向かかっていくかということになるだろう。宴のはじめの歌と呼応している①・②では「梅」を題材として相手の訪れを詠うが、ここで主人は、「君」「我が背子」と相手に対する呼称を変えつつ、女性の立場で、相手を招くことのみを望む歌となる。招く相手を「うるはし」と讃えるが「うるはし」は万葉集中の相聞では、主に女性や目下の者が男性や目上の整った形をほめる言葉である。この歌ではまづ相手を「君」と呼び「いや日異」に來る事を望んでいる。これは主人として始めに歌ったものと関わっていない。②の歌で、相手が來なかつたということ踏まえ、こちらでは今日の宴の後は、日を追う毎にあなたの來訪を願うと詠い出したのではないだろうか。更に相手を「我が背子」とより私的な表現として呼び、具体的な訪れとは「絶ゆることなく」來ることだと願うのである。「日本古典文学全集」では「ほとんど同じ内容で、用語の不用意さが認められる」とするが、「いや日異」は歌においては数量や程度が日ごとに増すことを慣用的にいう言葉であり、それに対して「絶ゆることなく」とは、具体的な行為を表現する言葉である。「萬葉集釋注」では「第三・四句の内容を説明していったもの」であり「待つ女の立場が強調される」として、繰り返す必要を説明している。このように、相手を招き入れること繰り返すのは、宴の終わりに主人の側から宴席の出席者への感謝となり意味のあることであろう。

⑨の歌では景物は詠われなかつたが、再び最後の⑩の歌では池をとりあげ、そこに住む鴛鴦を見ることが詠われる。鴛鴦は万葉集中で詠われることは多くはないが次の様な例をみることができる。

⑩妹に恋ひ寝ぬ朝明に鴛鴦のこゆかく渡る妹が使ひか

十一一二四九一

独り寝をしている作者にとつて雌雄ともにいる鴛鴦は自分が本来は共寝をするはずの「妹」の使いかとして、鴛鴦を通して今いない相手を偲んでいる。このように「鴛鴦」には、相手との結び付きを強調する意味があるものとしてよいだろう。⑩の歌では鴛鴦を序詞として、庭の鴛鴦を見つても「惜しい身」を相手に捧げるといふ宴に集う人々の思いとするのである。序詞としての「鴛鴦」は「君がまにまに」という相聞的表現と結びつくことにより⑨の主人の歌の相聞的表現を受けたと考えられる。眼前に広がる景から選り採られたものによって歌い継がれた宴は今、「鴛鴦」を見ることで詠い納められたといえよう。その場に集う人々によって作られた歌の世界は、今、「鴛鴦」に集約されて終わるのである。

むすび

問題とした宴の歌については梅を、「かぐはし」としていること以外はあまり取り上げられることがない。それは『萬葉集釋注』で論じられるように詠われた歌が「平板」であるという理由によるものである。しかしこの宴においては、むしろ、何事もなく眼前の景の中から

ふさわしいものを選び、詠い続けることに意味があったと思われる。万葉集の歌の最末期ともいべき位置にあるこれらの歌は、宴に集う者の共通の思いが常に背景としてあったであろう。政治的に不遇な中で、家持を中心とした人々は、同じ文化圏の中に身を置き、歌によって内面的結び付きを深めていったといえよう。そのような人々にとって歌に庭園を詠うことは、ただ目についた景を詠うのではなく、共有している実景の中から、思いにふさわしい景物を選びとることであり、それを歌で示すことよって相手との理解を確認し、共有の思いにふさわしい景を詠い継ぐことは、現実を超えた歌世界に身をおくことであつたのではないだろうか。この後に続く聖武への思いは、こうした現実を超えた歌の世界にこそ表現しうるのであつた。この歌群は直接的には聖武への思いは詠われないが、もはや詠うことでしか共有できない思いを表す歌群の序章ともいふべきであろう。

注① 田中大士氏「中臣清麻呂朝臣の宅での宴歌」『セミナー万葉の歌人と作品』第九卷

和泉書院 二〇〇五年五月

注② 中臣清麻呂は延暦二年（七八八）七月に八七才で薨じている。

注③ この宴以外で家持と同席する場の歌は以下の様である。

中臣清麻呂 二十一四二九六

大原今城真人 四四三六〇九（伝誦）・四四四二・四四四四・

四四五九・四五一五

市原王 一〇四二

甘南備伊香真人 四四八九

注④ 松本剛氏「カグハシ考」『萬葉』第九十九号 昭和五三年十二月

注⑤ 「梅花宴」（卷五・八一五〜八四六）、及び後に追和した梅の歌は漢詩の影響をうけて白梅の落花を雪に見立てる表現を多くみることができるといえる。

注⑥ 『日本新古典文学大系』四四九八歌の脚注。

注⑦ 『新潮日本古典集成』四四九八歌の頭注。

注⑧ 本居宣長『玉勝間』十三

注⑨ 『新潮日本古典集成』四五〇〇歌の頭注

注⑩ 『新日本古典文学新大系』四五〇〇歌の脚注

注⑪ 注④に同じ。

注⑫ 長歌は次のようなものである。

かけまくもあやに恐し 天皇の神の大御代に 田道間守 常世に渡り 八矛持ち 参る出来し時 時じくの 香久の菓子を 恐くも 残したまへれ 国も狭に 生ひ立ち 榮え 春されば 孫枝萌いつつ ほととぎす 鳴く 五月には 初花を 枝に手折りて 娘子らにつとにも 遣りみ 白たへの 袖にも 扱入れ かぐはしみ 置きて 枯らしみ あゆる 実 は 玉に 貫きつつ 手に 巻きて 見れども 飽かず 秋付けば しぐれの 雨 降り あしひきの 山の 木末は 紅に にほひ 散れども 橋の なるそ の 実 は ひた 照りに いや見 が 欲しく み雪 降る 冬に 至れば 霜 置 けども その 葉も 枯れず 常磐 なす いやさかばえに 然れこそ 神の 御代より 宜しなへ この 橋を 時じくの 香久の 菓子と 名付け けらしも

十八一四一一

注⑬ 長歌は次のようなものである。

皇祖の 遠き御代にも おしてる 難波の 国に 天の下 知らしめしきと 今のをに 絶えず言ひつつ かけまくも あやに恐し 神ながら わご大 君の うちなびく 春の 初めは 八千種に 花咲きにほひ 山見れば 見 のともしく 川見れば 見の さやけくものごと に 榮ゆる 時と 見し たまひ 明らめたまひ 敷きませる 難波の 宮は 聞こしをす 四方の 国 より 奉る 御調の 船は 堀江より 水脈引きし つつ 朝なぎに 梶引き 上り 夕潮に 棹さし下り あぢ群の 騒き競ひて 浜に出でて 海原見 れば 白波の 八重折るが 上に 海人小舟は ちらに 浮きて 大御食に 仕

へ奉るとをちこちに いざり釣りけりそきたくも おぎろなきかも
こきばくもゆたけきかもここ見ればうべし神代ゆ始めけらしも

二十一 四三六〇

注⑭ 『日本古典文学全集』では、この歌について政治的背景を強く読み取り、「藤原仲麻呂の専横を憎みながらも、奈良麻呂の変で破滅した人々のような過激な行為には同調せず、中道を歩み、長く生き続けようではないか、という提案」の歌とする。
四五〇一の頭注。

注⑮ 『日本古典文学全集』四五〇四歌の頭注

注⑯ 『新日本古典文学新大系』では、この歌の同じ内容ととれる表現について「相聞の体裁で詠み、かつ重複・停滞の表現が見えるのは、主人がいささか酩酊ぎみなのか」として、表現を変えることは目的をもってしたことではないとしている。四五〇四歌の脚注。

注⑰ 『日本古典文学全集』では、この歌についても政治的背景を強く読み取り「今城が来客一同を代表して貴兄を推戴したいという挨拶を兼ねて言ったのであろう」とする。
四五〇五歌の頭注。

注⑱ 橋本達雄氏はこの歌の「君がまにまに」という言葉について「時流を憤りつつ、一人の人に心を寄せてゆこうとしている霧囲気の中で」かつてその言葉どおりに奉仕してきた「聖武天皇の映像がくつきりと描かれたのではないだろうか」というように結びつけ、更にそれが次の歌群の題詞の「興に依り」という言葉を喚起させるものとなったとする。「大伴家持作品論攷」
塙書房 昭和六十年十一月

注⑲ 『萬葉集釋注』四四九六～四五〇五に関する釈文。

歌の本文は『新日本古典文学大系』（岩波書店）による。